越後地方の雪の伝承に関する環境知覚研究

樋口　祐太
（佐々木 高弘ゼミ）

目次

はじめに
Ⅰ　雪の伝承
（1）雪の伝承とは
（2）日本の雪の伝承
（3）雪の伝承に関する研究
Ⅱ　越後地方の雪の伝承
（1）上越地方の伝承
（2）中越地方の伝承
（3）下越地方の伝承
（4）伝承の分類
Ⅲ　現代にも生きる雪の伝承～雪太郎～
（1）雪太郎伝承
（2）上越市高田牧区宇津俣
（3）宇津俣地区での聞き取り調査
Ⅳ　雪の伝承に関する環境知覚
（1）「雪太郎」伝承に見る雪に対する肯定的な知覚
（2）雪の伝承に関する環境知覚
Ⅴ　最後に

はじめに

本稿は、雪の伝承について、環境知覚研究を用いて研究を行い、伝承地の住民の環境認識、特に雪に関する環境認識がどのように伝承に現れてくるのかを明らかにしようと試みるものである。

また、本稿で言う「雪の伝承」とは、雪中での怪異、雪に関する怪異、怪異の結果としての雪または雪に関する災害を内容に含む伝承とする。

Ⅰ　雪の伝承

（1）雪の伝承とは

「雪の伝承」とは何か。雪の伝承として真っ先に思い浮かぶのはやはり「雪女」ではないだろうか。『日本妖怪大辞典』によれば、各地で様々な呼び名を持ち、多くの場合は雪の降る晩や吹雪の時に現れるとされる。岩手県や宮城県では、出会ってしまうと精を抜き取られてしまうと言われ、新潟県では、人を凍死させたり、子どもを攫って生き肝を取ってしまうと伝えられている。また、ラフカディオ・ハーンの著書『怪談』に掲載された「雪女」[(1)]も有名だろう。本研究においても、事例として複数の「雪女」の伝説を取り扱う。「雪女」と一言に言っても、その伝承内容は様々で、研究テーマとして非常に興味深い。

一方で「雪女」以外では、思い浮かぶ「雪の伝承」というものはほとんどないのではないだろうか。筆者は新潟県の出身であるが、雪深い新潟という土地に住んでいても、この研究を始めるまでは「雪女」以外の「雪の伝承」を簡単にイメージすることは出来なかった。

日本人の雪に対するイメージは全て「雪女」という伝承に表されているのだろうか。決してそうではないと筆者は考える。「雪女」以外にも、「雪の伝承」は存在するはずである。

「雪の伝承」とはどのようなものか。「雪女」以外には無いのか。本研究は、このような筆者の疑問から始まった研究である。この研究を通して、筆者自身と、本稿を読んでいただく方々が、「雪の伝承」について少しでもイメージの幅を広げることが出来ればうれしい。

（2）日本の雪の伝承

では、実際に日本にはどのような「雪の伝承」があるだろうか。全国規模で採話を行っている伝説集を見てみよう。

『日本伝説大系』は、別冊２巻を含む全１５巻からなる伝説集であり、その採話は地域、県ごとに全国規模で行われている。この『日本伝説大系』の中に見られる「雪の伝承」はいくつあるだろう

か。

最初に出てくる「雪の伝承」は、第３巻南奥州・越後編の「雪女房」[2]である。伝承地は山形県西置賜郡白鷹町で、炭焼きの若者のところに雪の精がやってきて女房になるという話である。この「雪女房」の類話は山形県のものが他に５つ、新潟県のものが５つ、秋田県のものが１つ紹介されている。内容からも分かるが、この「雪女房」は前項の「雪女」系統の話である。

次に出てくるのは第１０巻山陽編の「跡隠しの雪」[3]であるが、これは第１２巻四国編の「お大師講の雪」[4]と同様の話と考えてよいだろう。伝承地はそれぞれ、岡山県勝田郡奈義町滝本、愛媛県上浮穴郡柳谷村小村である。内容は、題からも分かるように弘法大師の話で、一晩の宿を求める弘法大師に対して、「食事を出せないから」と断る家主に対して、「隣の家から食べ物を盗んで来い」「足跡を消してやる」と言われたので、その通りにすると、雪が降って足跡を隠すという話である。「跡隠しの雪」の類話は、岡山のものが他に５つ、広島のものが１つ。「お大師講の雪」の類話は愛媛のものが他に１つ紹介されている。しかし、この２つの話（内容的には１つ）は、「雪の伝承」というよりは大師の力を示すための「弘法大師の伝承」である。

つまり、『日本伝説大系』の中に出てくる「雪の伝承」は実質「雪女房」のみである。この他にも『日本昔話通観』などの全国規模の伝説、昔話集を見てみたが、「雪の伝承」は「雪女」系統のもの以外はほとんど見られなかった。

（３）雪の伝承に関する研究

このように、「雪女」系統以外の「雪の伝承」をなかなか見つけることが出来ないため、一旦捜索を中断し、「雪の伝承」に関する先行研究がないかを先に調べることにした。先行研究が発見できれば、その事例から「雪女」以外の「雪の伝承」が見つかるのではないかと考えたからである。しかし、結果を言ってしまえば「雪の伝承」に関する先行研究はほとんど無く、あったとしても「雪女」に関するものがほとんどであった。

「雪の伝承」はなぜこんなに少ないのだろうかと考えながら研究を続けている中で、インターネット上で「全国災害伝承情報」[5]というデータベースを発見した。これは、総務省消防庁のホームページで閲覧可能なデータベースで、ホームページには、

全国で発生した災害は各地に多大な被害をもたらし、それらの災害の教訓は各地域において記録としてあるもの、図画として残されているもの、あるいは物語、ことわざとして伝承されているものなどがあります。

そのような災害にまつわる資料や情報は、これまで国として整理されず今日にいたっており、その多くが各地域に埋もれたままとなっています。

全国災害伝承情報は、そうした各地域に残る貴重な資料を、国として整理集約し、インターネットを活用し広く一般に公開することを目的としたもので、平成１６年度から平成１８年度にかけて都道府県や市町村などの協力をいただき、調査を通じて収集した情報を整理集約しました。

とあり、全国規模で災害についての資料、情報を集めたデータベースであることが分かる。

1. 現在までに語り継がれる「災害」
2. 防災に関わる「言い伝え」
3. 個人による防災に係る取り組み
4. 組織による防災に係る取り組み
5. 防災に関する展示施設や体験施設
6. 添付資料

以上の６項目をPDFファイルで見る事ができ、1. 現在までに語り継がれる「災害」では、災害の通し番号、都道府県名、市町村名、災害伝承情報の内容、データ形態、出典情報の掲載がある（表１）。2. 防災に関わる「言い伝え」では、事例No、都道府県名、市町村名、言い伝えの内容、趣旨・ポイント、出典（添付資料）の掲載がある（表２）。

その他の項目のタイトルからも分かる通り、「防災」のためのデータベースである。一見関係が無さそうであるが、このデータベースを見ていく中で、「雪の伝承」が少ない理由の１つと考えられることが浮かび上がってきた。それは、災害などの「雪」の記録自体が少ないということである。

15000 2-1	新潟県		【災害名】横田切れ 【発生日時】明治29年7月 【被災地】新潟県西蒲原郡分水町横田他 【災害の概要】明治２９年７月、長岡から新潟にかけて、南蒲原郡、西蒲原郡全域を襲った大洪水。死者４８名、破壊建物1,648棟、床上浸水43,685戸、被害田畑58,742町歩 【教訓等】他に例のないほどの大規模かつ広範囲に被害をもたらしており、その惨状は「洪水さわぎ」「流れの親子」「全身の蛇」「機織乙女」「屋根の男」等、多くのくどき節として伝えられている。	・絵図（横田切れレプリカ）…新潟県立歴史博物館にて展示	・新潟県編集発行新潟県史通史編７、近代二、昭和６３年 ・五百川清大河津分水双書第一巻横田切れ２００２
15000 2-4	新潟県		【災害名】寛延4年（宝暦元年）の高田大地震 【発生日時】寛延4(1751)年4月25日 【被災地】新潟県上越地方 【災害の概要】震源は高田西方の山中、マグニチュード７～７．４と推定されている。「高田表大地震之節日記」（榊原文書）によると、５月９日までにとりまとめられた高田町以外の高田藩領の被害は、死者５０５人、怪我人２６２人、潰れ家２０９９軒、半潰れ家３１６２軒、用水江堤・堰・川筋等破損１６８ヶ所、山抜け崩れ・川欠け４７１ヶ所であった。 【教訓等】－	・文献資料	上越市史編さん委員会『上越市史』通史編３近世一（平成１５年）

表１

15201-1	新潟県	新潟市	地震のとき「マンザイロク、マンザイロク」といって、竹やぶに逃げる。	竹やぶは、倒れるものがなかった。「マンザイロク」は「万歳落（マンザイラク）」がなまったもので、危険なときにその災害を免れるために唱えたとされる呪文	
15206-1	新潟県	新発田市	・地震 神棚からタンコロ（神仏へ供える油に灯芯をさした灯具）とオミキスズ（御酒徳利）が落ちたら子供を竹藪へやれ。クデン（供殿）が落ちたら、ヒドコにカナバチかけて大人もにげれ。		新発田市史資料第五巻民俗（下）（昭和47年）
15206-2	新潟県	新発田市	・地震 肥塚にあがるとよい。焚火にはすり鉢をかぶせよ。		新発田市史資料第五巻民俗（下）（昭和47年）

表２

	災害名																				
都道府県	地震	噴火	津波	土砂崩れ	水害	海嘯	高波	高潮	洪水	火災	台風	竜巻	大風	干ばつ	大雪	吹雪	雪代	雪崩	雪泥流	降雹	合計
北海道	14	4	3	0	4	0	0	1	1	6	4	0	0	0	2	0	0	0	0	0	39
青森	14	0	1	0	4	0	0	1	0	7	5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	33
岩手	3	0	22	0	5	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
宮城	9	0	10	0	6	0	0	0	3	15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	44
秋田	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	9
山形	4	0	0	0	2	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	11
福島	1	2	1	0	8	0	0	0	0	6	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	20
茨城	2	0	1	0	1	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8
栃木	4	0	0	0	1	0	0	0	1	0	6	0	1	0	0	0	0	0	0	1	14
群馬	0	2	0	0	9	0	0	0	1	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
埼玉	7	0	0	0	4	0	0	0	8	2	11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	33
千葉	8	1	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
東京	8	5	4	0	4	0	0	0	2	6	8	0	0	0	0	0	0	0	0	1	38
神奈川	17	1	0	1	3	1	0	0	6	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	31
新潟	12	1	0	3	9	0	0	0	1	2	2	0	0	0	1	0	0	1	0	0	32
富山	1	0	0	1	6	0	1	0	0	3	4	0	0	0	10	0	0	0	0	0	26
石川	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
福井	4	0	0	0	7	0	0	0	0	18	4	0	0	0	7	1	0	0	0	0	41
山梨	3	1	0	0	4	0	0	0	0	5	4	0	0	0	1	0	1	0	0	0	19
長野	2	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
岐阜	5	0	0	0	4	0	0	0	1	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
静岡	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22
愛知	28	0	0	0	4	0	0	1	10	1	24	0	0	0	0	0	0	0	0	2	70
三重	9	0	0	0	2	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
滋賀	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
京都	1	0	0	4	2	0	0	0	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14

表３

表３を見てほしい。

これは、「全国災害伝承情報」の「現在までに語り継がれる「災害」を基に筆者が作成したもので、災害の件数を、都道府県、災害の種類ごとに統計したものである。これを見てもらうと分かるが、雪に関する災害はその他の災害に比べて伝承されている数が少ない。全９００件の内、雪に関する災害の記録は３１件しかない。つまり、「雪の伝承」が少ない理由は、伝承の元となる実際の「雪」の記録自体が少ないからと考えることができるのではないだろうか。

このように統計をとってみてようやく気づいたのだが、「雪の災害（雪）」というものは、その他の災害に比べて注目されない傾向にある。そもそも、冬季に常に降雪があるような地域は限られているし、当然と言われればその通りなのかもしれない。災害伝承の研究を見ても、雪の災害に関する研究はほとんど見られないが、地震や洪水に関する災害伝承の研究は多い。災害伝承の研究は様々な分野から行われていて、災害という側面から見るのであれば、「雪」についての研究方法自体はすでに多く存在すると言える。それなのに研究が少ないということは、やはり「雪」というものが注目されてこなかったからなのかもしれない。

しかし、「雪」への注目度が低いということに気づくと共に、その原因にも思い当たった。それは、全国規模で「雪」を見てきたこと自体である。雪が降らない地域の人々が雪に注目しないのは当然である。反面、それは、雪の降る地域の人々は雪に注目するということをあらわしているのではないだろうか。「雪」に関する災害の記録、伝承も、全国規模ではなく、各地域ごとに見ていけば発見できるかもしれない。そのように考えて、ためしに筆者の出身地である新潟県に注目して「雪の伝承」を探してみたところ、予想通り、全国規模の伝説集には出てこない「雪の伝承」を発見することが出来た。

Ⅱ　越後地方の雪の伝承

新潟県は元々、昔話や伝説が多く残っている土地である。さらに、戦後、昔話や伝説が消えていくことを危惧し、水沢謙一、小山直嗣などが県内を歩き回り、収集したことにより、多くの昔話や伝説が現在でも人々の記憶や、文献として残されている。それらの中には、筆者が探し求めていた「雪の伝承」も比較的多く残されている。

本稿で「雪の伝承」として具体的事例にあげるのは、小山直嗣の『新潟県伝説集成』の中の１８話である。『新潟県伝説集成』は上中下越と佐渡篇の４冊[(6)(7)(8)(9)]からなり、県内の伝説が計９３３話掲載されている。ただし、佐渡篇の中には雪に関する伝説は掲載されておらず、実質上中下越篇の３冊の中から紹介する形になる。上越篇に２話、中越篇に１１話、下越篇に５話掲載されている。実際にこれらの伝説がどんなものか見てみよう。

（１）上越地方の伝承

①「雪娘」中頸城郡妙高高原町[(10)]

昔、杉野沢の開拓地、御新田に三次という炭焼きが住んでいました。ある吹雪の晩、三次の炭焼き小屋へ若い女がたずねて来て、

「杉野沢まで行こうと家を出ましたが、途中で吹雪になり道に迷ってしまいました。今夜一晩、泊めて下さい」

と頼んだ。

三次は見たこともない娘だが、この吹雪では断ることもできないので、小屋に入れてお茶を出し大火を焚いてもてなした。すると娘はなぜか、なるべく火に近づかないように離れていた。そのうち三次は昼間の疲れと、晩酌の酔いが回ってきて、いつのまにか炉辺で横になり、ぐっすり眠ってしまった。

何どきかたって目をさました三次は、ふと炉の向こうを見ると、座っていた娘の姿が見えなかった。不思議に思って、座っていた跡を見ると、びっしょり濡れていた。三次が寒かろうと思って焚いた大火で、雪娘はとけてしまったのだった。

②「雪太郎」東頸城郡牧村[(11)]

昔、菱ヶ岳が見える宇津俣の高台に、「髯の長者」と呼ばれた大金持ちが住んでいた。自分の家から、直江津海岸まで、人の土地を踏まずに行けたといわれるほど広い土地を持ち、屋敷内に並んだ土蔵

には金銀財宝がぎっしりつまっていた。

長者は、その呼び名のとおり真っ白い立派な髯をたくわえていた六尺余りの大男だったが、心はやさしく、公共のためにはどんな大金でも出し、困っている人たちには米や味噌を恵んでいた。このため、人々から神様のように尊敬されていたが、ただ一つ不足なのは子宝に恵まれないことだった。

長者は子供の多い家をみると、

「うらやましいことだのう。わしにも一人でもいいから子供がさずからんだろうか」

といって、ため息をついた。だから、子供たちをかわいがることはたいへんなもので、泥んこの子供を抱き上げて頬ずりしたり、御殿のような自宅へ呼んで、いっしょに遊んだりごちそうしたりするのが何よりの楽しみだった。

ある冬の夜、トントンと雨戸をたたくものがあった。戸を開けて見ると、小さい男の子が雪まみれになって立っていた。長者は、すぐに子供を部屋に入れて、

「お前はどこから来たのだ。そして名前は何というんだ」

と聞いたが、子供は「雪太郎」という名だというだけで、そのほかのことは何も話さなかった。そして、

「おれは今日から、この家の子になるんだ」

といって、はしゃいでいた。長者夫婦はうれしくて、その夜はとうとう眠れなかった。

降って湧いたような子供の出現で、長者の家は急に活気づいた。いかにも利口そうな子供で、奉公人たちは「お坊ちゃま」といって敬い、長者はいっときも側を離れず、「雪太郎、雪太郎」といってかわいがった。

こうしているうちに、いつしか雪が消えはじめ、残雪の中で山桜の花がほころびる季節となった。ところが、気候がよくなるにつれ、雪太郎はだんだん元気を失ってきた。そしてある日、突然姿を消してしまった。長者夫婦の嘆きはひとかたではなく、急にふけこんでしまった。がっかりした老夫婦は、毎日雪太郎と暮らした楽しい思い出を語り、涙を流していた。

やがて春がすぎ、夏が終わり、秋になって寒い木枯らしが吹き出した。ある朝、菱ヶ岳の頂上が真っ白になったと思ったら、村にも初雪が来てそれが根雪となった。そして、吹雪が何日も続いたある晩、長者夫婦が火燵でお茶を飲んでいると、コツコツ、と雨戸をたたく音がした。戸を開けて見ると、そこには丸々とふとり、背も少し高くなった雪太郎がにこにこしながら立っていた。

夫婦は夢かとばかり喜び、雪太郎をしっかりと抱きしめた。こうしてまた、長者の家に幸せな生活が戻ってきた。しかし、やがて春がきた。そして雪が消えると、再び雪太郎はどこかへ行ってしまった。

それから何年か、雪太郎は冬来て、春になるとどこかへ去って行った。ところがある年、雪の降らない暖冬があった。その時は、いくら待っても雪太郎の姿は現れなかった。がっかりした長者は、その秋とうとう死んでしまった。そして老妻も、まもなくその後を追うようにして死んだ。

その翌年からまた雪が降ったが、雪太郎は再び現れなかった。そして、長者の墓地にだけ雪が降らなくなってしまったという。

（2）中越地方の伝承

③「雪小僧」栃尾市[12]

昔、森立峠の近くの一之貝の奥の方に、人里離れた三軒家があった。

ある年の大雪の降りしきる夜だった。一番山の手にある上の家では、一家そろって夜業をしていた。いろりに大きな鍋をかけ、中では輪切りにし

た大根に、味付けの塩鮭がぐつぐつと煮え、おいしそうな香りを部屋いっぱいにただよわせていた。

その時、入り口のくぐり戸を開けて、見たことのない七、八歳ぐらいの男の子が入ってきた。

そして、

「寒いので少しあたらせて下さい」

といって上がり込み、いろりのそばに座った。家の人は、

「こんな寒い晩にどこから来たの」

とたずねたが、子供は黙って笑っているだけだった。しばらくすると子供は、

「ありがとう。また来るよ」

といって吹雪の中へ出ていった。

子供が帰ったので家の人たちは、さて夜食にしようと、鍋のふたを取って見てびっくりした。汁だけで実が全然なくなっていたからである。おじいさんは、

「不思議なこともあるもんだ」

といいながらその夜は寝た。そして翌日も夜業をしながら大根を煮ていると、昨夜と同じ時刻に、また子供がやって来た。そしてしばらくいて帰ったので、鍋のふたを取って見ると、また汁だけで大根はなくなっていた。

それから数日後、おじいさんは親類の家へ用事に出かけ、そこに居合わせた若い衆にこの話をした。すると血気さかんな若者たちはおもしろがって、

「私たちがその小僧をつかまえて化けの皮をはがしてみせます」

といって、その晩、上の家へやって来た。そして隣の部屋に隠れていた。家の人たちは、いつものように大根の鍋をかけて夜業をしていると、子供がやって来た。そしていろりに手をかざしている時、隣の部屋から出てきた若い衆が、ぱっと夜着をかぶせ、上からたたきつけた。動かなくなったので開けて見ると、大きな獺がぐったりして死んでいた。

人々は、雪小僧の正体を知り、

「川が凍って食い物がなくなったので、大根煮を食いに来たのだろう」

とあわれに思った。

④「雪中の幽霊」古志郡山古志村 (13)

昔、ある村に弥太郎という大工が住んでいた。冬のある日、弥太郎は仕事の都合で遅くなり、夜の十時過ぎに隣村から老いた母親の待つわが家へ急いでいた。途中で雪が降り出し、村へ近づいたころは風も出て、猛吹雪となった。

弥太郎がふと前を見ると、見とおしのきかない前方の闇の中から、チリンチリンという鈴の音が聞こえてきた。

「今ごろ何だろう」

と思って闇をすかして見ると、白装束をした御嶽行者みたいな男が二人でこちらへ歩いて来る。近づいて見ると、額に三角の布を当て、その顔は蒼白で死人のようだった。それに腰から下が煙のようにうすれていた。

弥太郎は、これが話に聞く幽霊かと思うと、背筋から冷汗が流れた。しかし、もう逃げも隠れもできないので、雪道の外へ一歩踏み込んで道を譲ろうとしたら、相手も同じ側へ寄ってきた。そこで弥太郎は反対側へ寄ったら、幽霊もまた反対側へ寄ってきた。そして何か言いたそうな気振りを見せていた。しかし弥太郎は恐ろしさで、早くこの場をのがれようと、右へ寄ると見せて逆の左へ寄って、その場をのがれ、飛鳥のように走り続けた。

ようやく村にたどりついた弥太郎は、取っつきの家にとび込み、その家の人から送ってもらって家に帰った。それから二、三日後、弥太郎が寝ているところへ、先夜送ってくれた男が訪れ、

「今朝やっと判明したのだが、四、五日前、八海山の信者二人が寒行のため山へ登る途中、遭難して死んだそうだ。その霊魂が誰かに知らせようと帰って来たのに、お前さんが会ったのだ。話したそうにしていたのはそのためだ」

といった。それでこの幽霊出現の謎も解けたという。

⑤「雪女」北魚沼郡湯之谷村 (14)

昔、雪深い銀山平に吾作という若者が住んでいた。三歳のときに母親と死に別れ、年とった父親と二人暮しだった。

吾作が二十歳の年の暮れ、風邪をひいて寝ている父親に代わり、谷川へ正月用の魚をとりに出か

けた。家から出るときはよく晴れていたが、途中ではげしい吹雪となり、前を向いて歩くことさえむずかしくなってきた。このためあきらめて引き返そうとしたが、いつのまにかとっぷり日が暮れてしまった。困ったことになったと思い、ふり返って見ると、あまり遠くないところに、ぽつんと明かりが見えた。吾作は不思議に思いながらも、今夜はあの家で止めてもらおうと、明かりをめあてに元気を出して歩いて行った。

その家は小さい小屋だった。戸を開けると赤々と燃えるいろりのそばに、若い女がぽつんと座っていた。吾作は、

「吹雪に降り込められて困っているんだが、今夜泊めて下さい」

とていねいに頼むと、女は、

「こんなさむくるしいとこでよかったら、どうぞお泊りなさい」

と快く迎えてくれ、温かい粟がゆなど出してもてなしてから、

「わたしはこれから出かけてきます。となりの部屋に床をのべておいたから、ゆっくりお休みなさい。ただ、今夜のことは誰にも話してはいけませんよ」

といって、白いじゅばん一枚になり、荒れ狂う吹雪の中へ出て行った。吾作は、不思議な女もいるものだと思ったが、昼間の疲れが出て、ぐっすり眠ってしまった。

翌朝目をさますと、空はすっかり晴れ上がっていた。女はまだ帰っていなかった。お礼も言わずに帰るのは気がひけたが、父親のことも心配なので、そのまま帰った。

それから三年たった冬の夕方、吾作は宇津野の叔母を訪ねた帰り道で、とぼとぼと歩いている女を見かけ、声をかけると、日光まで行くのだという。吾作は、

「この雪で、女の足ではとても無理ですよ。今夜はうちに泊まって、明日出かけなさい」

といって連れ帰った。そして身の上話を聞いてみると、羽全国鶴岡のもので名をお雪といった。最近両親に死に別れ、まだ会ったこともない下野国日光の親類をたずねて行くのだといった。

「しかし行っても面倒をみてくれるかどうかわからないのです。それを思うと心細くて」

といって涙をふいた。雪は翌日も、その翌日も降り続き、ついに根雪になってしまった。このため雪が消える春までいるように引き止めたところ、お雪もその気になり、翌日から台所仕事や掃除、洗濯、針仕事までせっせと働いた。

やがて雪が消えて春がきた。しかしお雪は出て行こうとはしなかった。吾作親子もまた主婦代わりになって働くお雪をはなしたくなかった。こうして秋になった。父親はふとした病気がもとで、冬の初めにぽっくり死んでしまった。父の三十五日法事に来た叔母は、

「お父うが死んで、お前もたった一人になってしまった。年ごろだし嫁をもらわなけりゃいけないが、どうだろう。気心の知れたお雪さんをもらったら」

とすすめた。吾作も承知しお雪にも異存がなかったので、翌日簡単な式をあげ二人は夫婦になった。二人の仲はたいへんむつまじく、五年目には三人の子供もできた。

吹雪の荒れ狂っているある夜、三人の子供を寝かせつけたお雪は、いろりの側で子供たちの下着のつくろいをしていた。吾作は縄をないながら、五年前とちっとも変わっていない、お雪の美しい顔を見ているうち、何年か前に谷川へ魚をとりに行き、吹雪に降り込められて山小屋で泊めてもらったことを思い出し、その話をしたあと、

「あの時の女は、お前とよく似ていたよ」

と言うと、お雪の顔は急にけわしくなり、

「何をかくそう。あの時の女は、雪女であるわたしです。人に話さないという約束を破ったからには、お前さんの命をもらわなけりゃならないんだが、子供がかわいそうだから、命だけは助けてあげます。その代わり子供たちを大事にしてください」

というなり、すくっと立ち上がり、上の着物をぬぎ、白い下着一枚になって荒れ狂う吹雪の中へ出て行った。

⑥「雪女郎」北魚沼郡守門村 (15)

昔、守門岳の登山口近くに一人の猟師が住んでいた。ある日、鳥や獣を求めて山深く踏み入り、とうとう暗くなってしまった。このあたりは豪雪地帯で、冬になると丈余の雪で川も雑木もみんな

埋まり、一面の雪の原となった。そのうち風が出てひどい吹雪となった。

猟師はもう家まで帰れないので、どこか雪の吹きつけない場所をさがして野宿しようと、あたりを見回すと、そう遠くないところにぽつんと明かりが見えた。猟師はやっとその小屋にたどりついて一夜の宿を頼んだ。すると出てきた老婆は、

「わたしと娘の二人暮しでさびしく思っていたところです。どうぞ遠慮なくお泊まりなさい」

と快く迎えてくれた。

その夜、あたたかいものをごちそうになり、すぐ休むことにした。隣の部屋に案内された猟師は、そこに敷かれている夜具布団や調度品が実に立派で、この山小屋と不似合いであることに気づき、不思議に思った。それに娘もまれにみる美人だった。猟師は布団の中でゆっくり手足を伸ばしていると、かすかに襖があいて肌襦袢姿の娘が入ってきた。猟師の胸は急に高鳴ったが、昼間の疲れが出て、そのまま意識がもうろうとなり、やがて息絶えてしまった。

翌日、猟師が帰らないので、近所の人たちが捜しに出かけた。すると雪の原の真ん中で、猟師は下着だけになって死んでいた。そして側に蓑、笠、雪ぐつ、かんじき、弓矢がきちんと揃え、着物もたたんで置いてあった。村人たちは、猟師の安らかな死に顔を見ると、

「また、雪女郎にやられたね」

といって顔を見合わせた。

村人たちの話によると、昔、この近くに「朝日長者」という大金持ちの豪邸があった。ここに非常に美しい女中が働いていた。長者はこの女中をこよなく愛していたが、これがいつのまにか妻に知れた。妻はたいへん怒り、長者の留守のある日、女中を裸にしてしばり、雪の降りしきる川原で橋桁に逆さに吊るして虐殺してしまった。それから毎年冬になると、この女中の霊魂が雪女郎になって出没するようになったのだという。

⑦「雪虫」中魚沼郡津南町 (16)

昔、信濃川に沿ったある村に、貧しい母と娘が住んでいた。娘の名はお滝といって今年十三歳だった。お滝の母親は病身で、つねに床に伏していたので、お滝は幼いころから、母親の看病をしていた。

今年も母親の病気がはっきりせず、いつも呼吸困難で喉をぜいぜい、いわせていた。村人の話では、病人に元気をつけるには、鯉の生き血がいちばんだという。しかし鯉を買う金がなかった。

そのころ村の池や沼で鯉を飼っていた家が何軒かあった。この家から恵んでもらおうと頼んでみたが、誰も恵んでくれなかった。このためお滝は、信濃川へ行ってみようと思った。小さいころ、冬の寒い時に川の淵にじっと動かずにいる鯉を見たことがあったからだ。

ある日お滝は、母親の眠っているすきをみて、信濃川へ出かけて行った。しかし鯉は人目につかない深い淵の中におり、それをさがすのは容易でなかった。お滝は鯉が見つからないので、がっかりして帰ろうとした時、どこからか、

「お滝さん、お滝さん」

と呼ぶ声がした。声の方を見ると、小さい童が立っていた。お滝はこれが母親から聞いている鎮守の神様だと思った。母親の話では、大昔、この神様は茨の船に乗り、蓑虫の殻を着て天から降臨されたのだという。

お滝はうやうやしく礼をしていると、その小人は、

「さあ、ここに鯉が五、六匹いるから持ってゆき、お母さんにあげなさい」

といって姿を消した。お滝はこの鯉を持ち帰り、料理して母に食べさせ、生き血を飲ませた。すると母親の病状は急に快方に向かった。しかし、それも数日、ある日ぽっくり死んでしまった。

お滝は毎日泣き暮らしていたが、急に神様から鯉をもらったところへ行って見たくなり、出かけて行った。するとまた、

「お滝さん」

という、なつかしい声が聞こえてきた。お滝はその声の方へ歩いて行っているうち、見知らぬところまで来てしまった。そのうち日が暮れ、風も出て吹雪になった。お滝は疲れ切ってとぼとぼ歩いていたが、ついにぱったりと倒れ、再び立ち上がれなかった。

お滝が行方不明になってから、何か月かたった。そして雪も消えかかった。すると雪の上に、今まで見たこともない小さい蚊のような虫が発生し

た。誰言うともなく、この虫を「雪虫」と呼び、「お滝の霊魂」が虫になって出てきたのだという噂が広がった。

⑧「鬼五郎の復讐」南魚沼郡湯沢町 (17)

昔、三国連山の麓に、鬼五郎という男が住んでいた。体中が膿とかさぶたにおおわれ、耳も鼻もなく、まるで化け物のようなものすごい形相をしていた。

村の人たちは、なんとかして鬼五郎を村から追放しようと、小屋へ出かけて行って石を投げたり、悪口を言ったりしていじめた。このため小屋の板囲いが破れ、入り口の筵がぼろぼろになって、風雨が吹き通しになっていた。しかし、村人の中には、憐れに思っている人もいたが、恐れて近づこうとはしなかった。鬼五郎はいじめられるたびに、

「自分は不幸にしてこのような姿になったが、村人の仕打ちはあまりひどすぎる。人にうらみがあるものか、ないものか覚えておけ」

といって、復讐の気持ちを固めていた。

ある冬、突然大きな表層雪崩がこの村を襲い、鬼五郎の小屋を埋めてしまった。人々は、

「村の厄介払いができた」

といって喜び、死体捜索はもちろん、葬式も出さず、お経もあげてやらなかった。

すると、その翌年から毎年この日になると、村に大雪崩が発生し、村人が犠牲になった。それは、いくら用心していても子供たちは何かに吸い寄せられるように、ふらふらと外出したまま帰らなくなるのだった。

春も間近いある日、村のある猟師が山へ兎狩りに出かけた。山の途中で奇妙な足跡を発見、それをたどってどんどん山奥へ入っていった。するとその足跡は、大きな栗の木の下で消えていた。不思議に思った猟師は、近づいて栗の木の根元にある洞穴を見ると、その奥の方に雪崩で死んだはずの鬼五郎が、腐って溶けかかったすごい顔で、にたにた笑っていた。しかもその周囲には、子供の死体がごろごろ転がっていた。猟師はあまりの恐ろしさに声も出ず、必死で逃げ帰った。猟師が逃げ出すとき、鬼五郎は不気味な声で、

「このことを人に言ったら命はないぞ」

と言った。傷だらけになって家に帰った猟師は、そのまま床についてしまった。近所の人が見舞いに来てわけを聞いても、

「わしの不注意で崖から転げ落ちたのです」

といって、真相を明かさなかった。しかし病気がだんだん重くなり、あと何日もない命だと悟った猟師は、ある日家人や近所の人たちを枕元に呼び、いっさいの顛末を語ると息を引き取った。

これを聞いた村人たちは非常に怒り、鬼五郎を退治することに衆議一決した。数日後、村人たちは弓矢や鎌を持って山に集まり、三手に分かれて、崖の左右と下から、栗の大木目がけて包囲網を縮小していった。そしてあと少しという時、山の上から異様な物音がして大雪崩が発生した。

この日は、ちょうど鬼五郎の命日だった。村人たちは激怒と興奮のあまり冷静を失い、「鬼五郎の命日には必ず大雪崩が起こる」というジンクスをすっかり忘れていたのだった。雪崩はだんだん量を増し、地ひびきを立てて襲ってきた。そして鬼五郎退治にいった人たちを一呑みにし、さらに大きくなって村を襲った。この大雪崩のために村はついに全滅してしまった。こうして全滅した村の跡に、その後再び集落ができ、新しい三国村が成立した。

⑨「雪姫」長岡市 (18)

昔、長岡七万四千石の藩主牧野忠成の家臣に、中河内数馬という小姓がいた。非常に美男子で城中で評判の高い若者だった。

ある日、城中で袴を綻ばせたため、納戸へ入り、縫おうとしていると、ちょうどそこに居合わせた深雪という美しい奥女中が縫ってくれた。数馬は喜んで部屋を出ようとしたとき、運悪く通りかかった目付役の白井典膳に見つかってしまった。典膳は日ごろから口やかましいことで知られていたが、さらにまずかったのは、深雪が典膳の息子からの縁談を断った直後だったからだ。

当時「不義はお家のご法度」として、厳しく処罰されることになっていた。このため年の瀬も迫ったある日、突然二人は謹慎を命じられ、数馬は自宅蟄居、深雪は無期宿下りとなった。

やがて正月となり町に門松が飾られたが、二人にはなかなか赦免の沙汰がなかった。そのころ長岡は、深い雪におおわれ、吹雪の日が続いていた。

そんなある夜、数馬は雨戸をたたく音で目をさまし、戸を開けて見ると、そこに一面に雪をかぶった深雪が立っていた。納戸で会ってから二人の胸に恋が芽生え、謹慎になってからも、その思いがますます燃えさかっていたので、その夜二人の心と体は自然に結ばれてしまった。その夜以来、深雪は毎夜数馬をたずねてきた。どんな吹雪の夜でも、一回も欠かしたことはなかった。

ところがある夜、甘い陶酔と感激を抱きしめて帰って行く深雪の後をつける黒い影があった。そのうちこの黒い影は、深雪に追いすがり、

「不義者、思い知れ」

と暁闇を破るような鋭い声と共に、深雪を一刀のもとに斬り殺してしまった。鮮血に染まった深雪の死体の上にしんしんと雪が降り積もった。この夜、長岡は例年にない大雪となった。そして多くの雪姫が出没した。

昔から雪女は、永遠に老いを知らぬ処女といわれているが、いったん紅い雪にふれるとたちまち性に目ざめ、邪淫の女となってしまうという伝承がある。この夜殺された深雪の霊魂は、深雪の血を浴びた雪姫に乗り移ったのである。

翌日の晩も、その翌日の晩も深雪の霊魂は、前と同じように数馬を訪れた。二人の愛情は夜毎に深まり、その情交も激しさを増し、燃え上がっているのに、深雪の体は氷のように冷たかった。しかし、深雪の死を知らない数馬は、それに気づかなかった。

やがて長岡にも春が来て、雪が消えはじめた。そんなある夜の明け方、深雪は何かを抱いて訪れ、

「昨夜、あなたの子供を安産しました」

といって、それを差し出した。数馬は二人の交渉が始まってから三、四か月なのに、子供が生まれたのは少しおかしいと思ったが、それでもうれしく、

「さあ、上がって赤ん坊を見せてくれ」

といったが、深雪はこの日に限って部屋へ入ろうとはしなかった。

そのうち背後から、強い春の陽光が差し込んできた。すると深雪は「あっ！」と叫んだ。その瞬間、深雪の姿はたちまち消えてしまった。びっくりした数馬がそこに置いてあった包みを開いて見ると、純白の産衣に包まれた一握りの雪であった。数馬はこの雪の塊を抱いたまま、いつまでも放心したように立っていた。

⑩「足跡隠しの雪」長岡市 (19)

昔、大積に源内どんという家があり、老婆が一人で住んでいた。夫と早く死に別れ子供もなかったので、全くの孤独だった。しかし熱心な仏教信者だった。

ある凶作の年だった。一人の旅僧がこの村を訪れ、ある家で一夜の宿を頼んだが、にべもなく断られてしまった。困った坊さんは次の家で同じように頼んだが、やっぱり断られた。坊さんはあきらめて村はずれまで歩き、村で一番貧しい源内どんの家を訪れた。そして宿を頼むと、婆さんは、

「何もできないが、それでもよかったら泊まっていかっしゃれ」

と快く迎えてくれた。しかしこの家には坊さんに食べさせる食料もなく、着せる布団もなかった。このため囲炉裏の火を絶やさないようし、熱いお湯を出してもてなした。坊さんは野宿よりありがたいと礼を述べ、炉端に座ったまま眠りについた。

婆さんは、明朝坊さんに食べさせるものを考えていた。正月用に大切にしていた小豆と餅米で粥をつくって食べさせることにしたが、おかずが全然なかった。婆さんはそっと立ち上がって外へ出ると、忍び足である家の大根貯蔵場へ行き、太いのを四、五本引き抜き、抱えて帰った。

ところが、婆さんは自分の足跡がはっきり土についたことに気づかなかった。このため朝になれば村人から泥棒呼ばわりされることが必定だが、これを先ほどから知っていて、知らぬ顔をしていた坊さんは、婆さんの心情を思い、なんとかして婆さんを救ってやりたいと考えていた。

翌朝、たいへんな大雪になった。雪の多い地方だが、初雪がこんなに降るのは珍しかった。このため婆さんの足跡が雪の下になり、大根泥棒の罪は誰にも知られずにすんだ。

そのころ源内どんの家では、あたたかい餅米と小豆粥と味噌をぬった焙大根で満腹した坊さんが、婆さんに仏法の功徳を説いたあと、厚く礼を言って立ち去った。この坊さんは諸国を行脚中の弘法大師だといわれている。今でもこの地方では「大師講」に小豆粥と大根焼きを食べることにし

ている。

⑪「雪夜の怪」長岡市[20]

明和年間の話だという。長岡藩士樋宮某の屋敷に、三条在の生まれだという十七、八歳の美しい女中が雇われていた。気立てがやさしく働き者だったので、主人夫婦からかわいがられていた。

ある時、出入りの髪結いがこの家を訪れると、子供の泣き声が聞こえたので、何気なくのぞいて見ると、女中の側で赤ちゃんが眠りからさめて泣いていたが、どうしたのか、寝かしつけている女中の首が見えなかった。髪結いはびっくりしたが、自分の見間違いだろうと思い、奥さんの髪を結い終わって帰りに見たら、女中はいつもと変わったところがなく、子供をおぶってお勝手仕事をしていた。

それから数日後、樋宮家をたずねた髪結いは、例の女中がいないので、どうしたのかとたずねると、

「あの娘はよい子だが、寝ている時ときどき首が見えなくなるので、気味が悪くて暇をだしました」

といった。それで自分の見間違いでないことがわかった。

その秋、ふとした病気で子供が死亡、間もなくその母親も気落ちして死んでしまった。急に妻子を失った樋宮は人生の無常を感じ、主君から暇をもらって諸国巡礼の旅に出た。

樋宮は各地の神社仏閣に参拝し、その年の歳末も近いある日、故里に近いある峠にさしかかっていた。この冬は大雪で越後の山野は毎日吹雪が続いていた。樋宮は股まで埋まる雪をかき分けて歩いていたが、疲れと空腹でもう歩けなくなってしまった。その時近くでぽつんと明かりが見えた。樋宮はようやくこの家にたどりつき、一夜の宿を頼んだ。

すると出てきたこの家の主人夫婦は快く迎え、温かい粟の粥を出してもてなしてくれた。樋宮は「地獄に仏」と感謝し、隣の部屋でゆっくり手足を伸ばして寝た。

その夜中、ふと目をさまし耳をすますと、にぎやかな話し声がした。樋宮は好奇心も手伝って、その部屋をのぞいて見てびっくりした。首だけ集まって話をしていたからだ。その首は一つは主人で、一つは妻、そしてもう一つは以前自分の家に奉公していた、あの女中の首だった。樋宮はその時、「ロクロ首は、首の知らないうちに体を別の場所へ動かしておくと、元につかない」という言い伝えを思い出した。このため別の部屋で寝ていた三人の体をさがし、外へ運び出し、谷底へ突き落としてしまった。

そして戻ってくると、親方首は、

「もういいだろう。さっきの巡礼を連れてこい」

と妻の首に命じた。飛び立っていった妻の首はやがて戻って来たが、

「たいへんです。わたしたちの体がなくなっています」

と悲痛な声で告げると、そのまま動かなくなってしまった。だが親方首だけは、

「おのれ、巡礼め」

といって、樋宮めがけて飛びかかってきた。しかし樋宮は元武士、とっさに身構えると拳を握って一撃を加えた。

こうして樋宮と首が血みどろになって闘っていると時、どこからか純白の衣に身を包んだ美しい女が黒髪をなびかせて現れ、猛吹雪を吹きかけると首は床に落ち動かなくなってしまった。しかしこの時、大音響と共に大雪崩が発生、家も人も首もみんなこなごなに砕けて谷底へ落下していった。

⑫「吹雪の泣き場所」三島郡越路町[21]

江戸時代の話だという。吹雪の荒れ狂うある年の暮れ、岩田から柏崎方面へ急ぐ二人連れの旅人があった。中年の女と前髪を立てた少年で、二人は親子だった。

二人は昼すぎに麓の茶屋を出たのだが、大吹雪のため裏無峠にさしかかったころは、すっかり日が暮れていた。ふと見ると近くに山小屋があった。親子は喜んでこの小屋をたずね一夜の宿を頼むと、老婆が出てきて快く迎え、大きな火を焚き、温かい稗の粥でもてなしてくれた。その夜中、母親がふと目をさますと、隣の部屋からへんな物音が聞こえてきた。のぞいて見ると、老婆が一生懸命に山刀を研いでおり、そばで髯づらの男が二人じっとそれを見つめていた。母親は驚いて逃げ出そうとし、転んでしまった。この物音に気づいた

老婆は、
「感づかれたようだ。すぐ殺してしまえ」
といった。すると男たちは親子の部屋に押し入り、逃げようとする母親を後ろから一刀のもとに斬り殺してしまった。

これを見た少年は本能的に外に飛び出し、一目散に走り出した。するとどこからか母の亡霊が現れ、先になって安全なところまで案内してくれた。そこが柏崎だった。

この惨劇があってから十年すぎた。そしてまた吹雪の歳末がやってきた。ある日、吹雪の裏無峠を急ぎ足で登っていく若い武士があった。この武士は十年前母を殺され、その復讐を誓って武術を磨いていた、あの時の少年だった。

武士は山小屋に着くと、十年前と同じように一夜の宿を頼んで泊まった。そして夜中に一刀の鞘を払って現れ、
「我こそは、十年前にお前たちに殺された女人の一子なるぞ。いざ覚悟しろ」
といって斬りかかった。すると老婆と男たちは、
「何を生意気な」
といって逆襲してきた。しかし盗賊たちは武士の敵ではなかった。壁ぎわまで追いつめられ、勝負あったと思ったとたん、武士の足元が崩れ、深い陥穽に落ちてしまった。盗賊どもは、
「ざま見やがれ」
といって、上から土をかぶせた。武士は、
「残念だ。母の敵も討たずに相果てるとは」
といって死んでいった。それから二日目の真夜中、この小屋は突然火を出し全焼した。そして焼け跡から三つの死体が発見された。しかし落とし穴の中の死体は永久に発見されなかった。ただ、樵たちの話によると、吹雪の日に峠を通ると、どこからともなく、
「残念だ。母の敵も討てず相果てるとは」
という血を吐くような、悲痛な叫び声が聞こえてくるという。村人たちはここを「吹雪の泣き場所」と呼んでいる。

⑬「塚山峠の雪女」三島郡越路町 (22)

昔の話である。ある吹雪の日、塚山峠を蓑笠をつけ、かいがいしく身支度した若者が、かんじきで雪を踏みしめながら登って行った。男は隣村へ用事に行き、泊まれと言われたのを振り切って帰るところだった。

ところが冬の日は暮れやすく、頂上まで来たころには、すっかり暗くなってしまった。そして吹雪はますます強くなってきた。若者は進むに進まれず、立往生していると、突然はげしい突風がきて、雪の吹きだまりへ転げ落ち、気を失ってしまった。しばらくして意識を取り戻した男は、あたりを見回すと、前方に白い着物を着た若い女が立っていた。

よく見ると身長が一丈もあり、髪が真っ白で非常に美人だった。そして不思議なのは、あたりが真っ暗なのに、女だけがはっきり浮いて見えることだった。

そのうち女は、後ろへついてこいと言わぬばかりに無言で歩き出したので、その後ろへついて行くと、村の入り口でぱっと消えてしまった。若者が帰宅した時、家のものはまだ心配して起きていた。彼は問われるまま峠でのできごとを話すと、父親は、
「そりゃ雪女だ。雪女に命をとられた話はあるが、雪女に助けられたのは珍しいことだ」
といって喜んだという。

（３）下越地方の伝承

⑭「雪女」三条市 (23)

文明年間、須頃から荻島にかけての原っぱに、冬になると雪女が出るといわれていた。そのころ

の話である。上須頃に為吉、おふみという若い百姓夫婦が住んでいた。二人は相思相愛のおしどり夫婦で、生後三か月ぐらいの男の子があった。

ところが為吉は、半年ぐらい前から身体の調子が悪く、最近では食事も喉へ通らなくなった。今でいうガンだった。死期をさとった為吉は、おふみが外出中のある日、首を吊って死んでしまった。帰宅したおふみはこれを見て驚き、自分も後追い自殺した。後に残された子供は、死んだ母親の足元で、火のついたように泣いていた。その時、赤ん坊の枕元に白い姿の美しい女が、忽然と現れ、赤ん坊を抱いていずれかへ立ち去っていった。

それから十年の歳月が流れた。この年も大雪だった。須頃の子供たちは村の神社へ集まって、雪洞を作り遊んでいると、どこから来たのか十歳ぐらいの男の子が来て、みんなの仲間になった。子供たちはこの子ともすぐ仲良しになり、雪洞の中で遊んでいると、雪洞はかすかな音を立てた。男の子は、

「おい、雪洞が崩れるぞ。早く逃げろ」

と大声で叫んだ。このためみんな逃げ出したが、たった一人名主の一人娘あけみだけが逃げおくれ、崩れた雪の下になってしまった。子供たちは青くなっていると、この男の子は崩れた雪をたちまちかき分け、窒息寸前の娘を無事助け出した。

これを知った名主の十兵衛は非常に喜び、男の子を連れ帰ってごちそうし、身の上話をたずねた。すると雪之助は一年中雪のある山奥で母と二人で暮らしていたが、ある日母親が、

「実はお前はわたしの実の子ではない。わけあって今まで育ててきたが、これから生まれた村へ帰って暮らしなさい」

といって、ここを教えてくれたのだという。

この話を聞いた十兵衛は、十年前に死んだ為吉夫婦のことを思い出した。その時神かくしにあった子供がこんなに大きくなったのかと感動し、娘の命の恩人であるこの子を、親代わりになって育てる決意をした。

それからまた十年たった。雪之助は立派に成人した。十兵衛は利発な雪之助を娘の婿にし、自分の跡継ぎにすることに決めていたが、そのころすでに二人は離れられない仲になっていた。二人の結婚が雪消えの四月と決まったある日、雪之助は十兵衛に、

「この喜びを山の母に報告してきます」

といって、四、五日暇をもらい山へ出かけていった。

雪之助は険しい雪山を幾つか越えて、なつかしい谷底の洞穴の前まで来ると、若い美しい女が現れ、

「ずいぶん立派になったのう」

と出迎えてくれた。雪之助は十年前と少しも変わらない養母の美しさにびっくりした。それは須頃小町といわれるあけみの美しさなど問題にならぬ魂まで吸い込まれるような美しさだった。

養母の美しさに魅せられた雪之助は、もう里へ帰ろうとはしなかった。母親もまた立派に成人した雪之助はほれぼれと見つめるようになり、里へ帰れとは言わなかった。そしてある夜、二人は男と女として互いに求め合い、深い契りを結んでしまった。すると突然紅い雪が降り出し、雪之助の見ている前で養母の身体が足元から徐々に解けていった。

そのころ須頃の里では、名主の一人娘あけみが、雪之助との愛の結晶である男の子を出産した。

⑮「雪塚の猫」東蒲原郡上川村 (24)

寛永年間の話だという。深雪地として知られる上川地方は、十一月だというのにたいへんな雪だった。日光寺の住職幽元和尚は、この雪をじっと見つめていたが突然、

「人間の心は、この雪のように清く静かでなければならない」

とつぶやいた。

翌朝、幽元は朝の勤行を終えると表へとび出し、中庭に雪の山を築き、頂上に「雪塚」と書いた板を立てた。その夜、寝ている幽元の顔をなめるものがあった。目をさまして見ると真っ白い猫だった。和尚はこの猫を「雪」と名づけてかわいがっていたが、ある日突然姿を消してしまった。

そのころ江戸城では、三代将軍家光の姪で八歳になる水戸藩の姫が城に滞在中病気になり死んでしまった。湯川の別邸で行われたその葬式の最中、どこからか雪片が舞い、猫の鳴き声がしたと思ったら、突然、棺桶が宙に浮き上がった。驚いた将軍は江戸相撲の力士小影を呼び出し、棺桶を引っ

ぱらせたがびくともしなかった。そこで東叡山の住職善鸞を呼んで読経してもらったところ、棺桶はさらに上昇して天井板に張り付いてしまった。これを見た善鸞は、

「これを戻すには、愚僧と同門で越後の蒲原に住む幽元という僧に頼むより方法がございません」

と言上した。そこで将軍家では、家臣の菅沼新八郎を越後へ差し向け、幽元を連れて来て祈祷してもらった。幽元が一心に読経している時、どこからか雪片が舞い下り、猫の泣き声がしたと思ったら、棺桶はするすると畳の上へ下りてきた。そしてようやく葬式は無事に終わった。幽元の法力にいたく感動した将軍は、即座に日光寺へ「寺領三百町歩」を永代寄進した。

翌日、幽元は江戸を発って越後へ向かった。幽元は帰るとすぐ、小僧に雪塚のことをたずねた。雪塚は幽元が江戸で棺桶を元に戻したところ、忽然と消え去ったという。この不思議な白猫は、幽元が崇拝している雪の精だったという。

⑯「雪の神」東蒲原郡上川村 (25)

昔、福島との県境にある山の中に、太郎作という樵と次郎兵衛という樵が住んでいた。ある吹雪の夜だった。太郎作の小谷の戸をたたく者があった。出て見ると、軒下に熊と狐と兎がうずくまっていた。動物たちは餌をさがしに出て道に迷い、このままでは凍死してしまうので相談の結果、人間の家に泊めてもらおうとたずねて来たのだった。

太郎作は親切ごかしに家の中へ案内し、動物たちの隙をうかがって殺してしまった。動物たちは、だまし討ちにされた悔しさで成仏できず、魂は死骸から抜け出して雪の原をさまよい歩いていた。そこへ雪の神が現れ、動物たちに新しい肉体を与えてやった。

動物たちは、今度は近くの次郎兵衛小屋をたずねた。すると次郎兵衛は、

「さぞ寒かっただろう。どうぞゆっくり休んでおくれ」

といって炉に薪をくべ、あたたかい雑炊をふるまってくれた。動物たちは同じ人間でもこんなに違うものかと、次郎兵衛に感謝した。

雪の神はこの晩大活躍して、たくさんの雪を降らせた。神様は次郎兵衛の小屋の上空を通ったとき、中をのぞいて見たら、炉端に次郎兵衛と三匹の動物が抱き合うようにして眠っていた。そしてこんどは、太郎作の小屋をのぞいて見た。すると太郎作は、先ほど殺した動物の皮をはぎ取っていた。

翌朝、雪の神が再び次郎兵衛の小屋をのぞいて見たら、次郎兵衛の小屋をのぞいて見たら、次郎兵衛と三匹の動物は楽しそうに、自在鉤にかけた鍋からお粥をすくって食べていた。そして太郎作の小屋をのぞいて見たら、太郎作は動物の皮の上で死体になっていた。

⑰「おとわ吹雪」岩船郡神林村 (26)

昔、神納に徳の高いお坊さんがいた。ある冬の二月、隣村へ用事に行き、遅くなってから帰ってきた。そして石川の土手の上まで来ると青い火玉がとんでいた。近づいて見ると髪をふり乱した若い女の幽霊だった。幽霊は坊さんを見ると近づいてきて、

「わたしは、とわという者で、ことしこの村へ嫁入りしたのです。ところが姑は意地の悪い人で、わたしを牛馬のように使い、猫といっしょに食事をさせてきました。わたしはじっとがまんしていましたが、この七日、夫の留守の日に屋根の雪おろしをさせたあと、小袖一枚で裏の竹藪の雪を払えといいました。わたしは夜中までかかって雪を払い、家に入ろうとしたが入れてくれません。そこで実家へ行こうと途中まで来ましたが、寒さとひもじさのため、雪の中に倒れて死んでしまいました。どうぞ、このことをわたしの両親や兄弟に知らせてください」

といって、さめざめと泣いた。坊さんは、寺へ帰らずすぐ女の実家をたずねて、このことを知らせ、死体を持ち帰ってねんごろに供養した。

このことがあってから神納地方では、毎年二月七日は大雪、そして八日は大吹雪で、雪が悪魔のように荒れ狂い、青い火の玉がとび回るといわれる。人々はこれを「おとわ吹雪」と呼んで恐れ、この日は家に閉じこもって外出しないようにしている。もし出かけると、おとわの霊にさそわれて、必ず吹雪倒れして死ぬといわれている。

⑱「吹雪倒れ地蔵」岩船郡山北町 (27)

明和年間の話だという。羽越国境鼠ヶ関に近い峠を、吹雪にあえぎながら歩いている旅人があった。ふと前をすかして見ると、白い着物を着た若い女が歩いていたが、不思議なことに雪は女の体のそばまでくると、全部吸い寄せられていた。旅人が近づくと、女は、

「どこまで行かれますか」

とたずねた。男が、

「熱海から酒田まで出たいのですが」

というと、

「それはたいへんです。もうすぐ日が暮れますから、今夜はわたしのところで泊まり、明日出かけなさい」

といって自分の小屋へ連れ帰った。

それから数日後、勝木の樵がここを通り、凍死している男を発見した。男は満足したような安らかな顔をしていた。村人たちは、

「また雪女郎にやられたな」

といった。そのころ雪女郎にやられた男は、さびしがって友を呼ぶといわれ、続いて遭難があった。そのため村人たちは、雪が消えてからここに地蔵さまを立てて、男たちの霊を慰めた。それからこの峠では、吹雪倒れするものがなくなったという。

人々はこの地蔵さまを「吹雪倒れ地蔵」と呼んでいたが、いつの間にかどうしたわけか「茂助地蔵」と呼ぶようになった。

（４）伝承の分類

『新潟県伝説集成』には市町村名までしか伝承地が記載されておらず、詳しい場所や伝承者は分からない。しかし、現地で聞き取り調査や資料収集を行えば、さらに詳しい情報や、話のバリエーションを見つけることが可能だろう。本稿では、上越篇②の「雪太郎」について現地での聞き取り調査と資料収集を行った。その結果については次章で詳しく書くが、その前に、以上の１８話の伝説を整理したい。

「雪女」系統の伝承

まず気になるのは、やはり「雪女」系統の話が多いことだ。１８話中①⑤⑥⑨⑬⑭⑱の７話が「雪女」系統の話である。しかし、その内容はさまざまで①の「雪娘」は、一晩の宿を求めて炭焼きの家を訪れた雪女に、そうとは知らずに炭焼きが焚いた囲炉裏の火で溶けてしまうというもので、非常にシンプルな内容である。ただし、雪女が人家に訪ねて来るという形態は他の「雪女」系統の話にも多く見られ、「雪女」系統の話の基礎的な要素の一つと言えるかもしれない。⑤⑨でも人家に雪女が訪れるし、ラフカディオ･ハーンの「雪女」にもそのような描写がある。また、ラフカディオ･ハーンの「雪女」のように、人家を訪れた雪女と人間が婚姻関係を結ぶものも多い。⑤⑨は共に雪女との婚姻関係がある。そして、これらの内容は一般的に広く知られている「雪女」の内容ではないだろうか。そういう意味では、⑥⑬⑭の３話はあまり一般的とは言えないかも知れない。また、⑨に関しても、人家への来訪、婚姻という内容を含むものの、ハーンのものや⑤とは大分毛色が違う。

⑥は、雪女が訪ねて来るのではなく、逆に、雪女の住処へ人間が訪問する話である。ただし、人間側からの訪問というよりも雪女側が人間を誘い込んでいるように考えられる点が⑤などとは違う。また、この話は死んだ女が雪女となって現れるというもので、⑨の話にも共通する。⑱も⑥同様「雪女郎」の話であるが、雪女の正体に関しては特に言及されていない。

⑬は、「雪女」系統の話の中では珍しく、人間が雪女に助けられるという話である。話中でも、

雪女に助けられた若者の父親が、

「そりゃ雪女だ。雪女に命をとられた話はあるが、雪女に助けられたのは珍しいことだ」

と言っている。これは、逆に考えると、「雪女」は基本的には恐ろしいものとして住民に捉えられていたと考えることもできる。

⑭は、両親を亡くした子供を雪女が親代わりになり育てるというもので、話の途中までは幸せな結末を予想させるものの、最終的には雪女に魅了された子供（この段階では成人している）は雪女と契りを結んでしまい、その結果、育ての親である雪女を失ってしまう。

このように、「雪女」系統の話でも、それぞれの性質には違いがあり、「雪女」として一括りにすることはできないように思われる。

「雪女」以外の伝承

次に「雪女」以外の伝承であるが、上記の７話を除く②③④⑦⑧⑩⑪⑫⑮⑯⑰の１１話である。

③は、小僧に化けた獺が訪ねて来るという話である。⑯も吹雪の中動物たちが人家を訪ねて来る話で、これらの話からは、人間以外の動物でさえも、雪に苦労している様子をうかがい知ることができる。

１１話中３話に幽霊の話がある。④⑦⑰がそうである。④は山で遭難した行者の幽霊に出会う話で、⑦は死んだ女の霊魂が虫となって現れる話である。⑰は吹雪の由来として「おとわ」という女の幽霊がでてくる。

⑧は、男のうらみから雪崩が起き、村が全滅してしまうという話である。吹雪に関する話はいくつかあるが、雪崩に関する話は１８話中これと⑪の２話である。⑪にはロクロ首が登場し、「雪夜の怪」というタイトルではあるものの、最後の場面以外では雪との関連性が薄い印象を受ける。

⑩は、『日本伝説大系』のもの[28]と同様と考えていいだろう。弘法大師の力を示すと共に「大師講」の食事の由来についての話である。

⑫は、「吹雪の泣き場所」という地名に関する由来譚である。吹雪の中で死んだ男の悲痛な叫びが聞こえてくるという話である。

⑮は、白猫に化身した雪の精についての話である。この雪の精の性質ははっきりとせず、怪異を起こす理由が明示されていない。

伝承の分類

『新潟県伝説集成』の中の１８話の「雪の伝承」を見てみると、広く知られている「雪女」のように、恐ろしい、悲しいというマイナスのイメージを抱かせるものばかりではないことがうかがえる。研究を開始した当初筆者は、「雪」というものは生活を妨げる存在であり、「雪の伝承」にもそのマイナスイメージばかりが現れてくると予想していた。しかし、全国規模ではなく一地域に注目して伝承を見てみると、決してそうではないことが分かった。降雪地域の住民は「雪」を否定的に捉えるばかりではなく、肯定的に捉える視点も持っているように感じられる。

そこで、「雪の伝承」には、「雪に対するプラスイメージ」を含むものと「雪に対するマイナスイメージ」を含むもの、あるいはその両方を含むものがあると仮定して、ここからは、『新潟県伝説集成』の中の「雪の伝承」１８話を分類し、特に「雪に対するプラスイメージ」の話に着目して具体的な考察を行っていきたい。

分類は、【雪に対するプラスイメージ】【雪に対するマイナスイメージ】【プラス、マイナスの両方を含む】【その他】の４項目で行う。

【雪に対するプラスイメージ】
・②「雪太郎」
・⑬「塚山峠の雪女」

【雪に対するマイナスイメージ】
・④「雪中の幽霊」
・⑥「雪女郎」
・⑦「雪虫」
・⑧「鬼五郎の復讐」
・⑨「雪姫」
・⑪「雪夜の怪」
・⑫「吹雪の泣き場所」
・⑰「おとわ吹雪」
・⑱「吹雪倒れ地蔵」

【プラス、マイナスの両方を含む】
・⑤「雪女」
・⑭「雪女」
・⑯「雪の神」

【その他】
・①「雪娘」
・③「雪小僧」
・⑩「足跡隠しの雪」
・⑮「雪塚の猫」

その他に関しては、他の３項目に当てはまらない、あるいはどこに当てはめてよいか判断できないものを分類した。

分類を行ってみてまず感じるのは、やはりマイナスイメージの話が多いということだ。４項目の中でもっとも多くの話がここに分類され、全体の約４割を占めている。⑫⑰⑱のように、「吹雪」という災害的な状況、環境を怪異が起こる場所としてマイナスイメージで捉えているし、⑧のように、「雪崩」の原因を鬼五郎という男のうらみ＝人知人力の及ばないものであると捉えているところから、降雪地域の住民の「雪」に対する未知の恐怖を感じる。「雪」は、自分たちの力ではコントロールできない、得体の知れないものなのだ。

プラスイメージの話は２話と少ないながらも分類することができた。⑬は「雪女」が人を助けるという話であり、通常は人間にとって脅威となるはずの「雪（を象徴する雪女）」がプラスイメージで語られている。②の「雪太郎」についても「雪」が降ることを肯定しているように思われる。しかし、なぜ「雪」に対してプラスイメージを持つのかはこれらの伝説を見ているだけでは分からない。

プラスとマイナスの両方のイメージを持つ話に関しても、「雪」に対してマイナスイメージを抱く理由は容易に想像することができるが、なぜプラスのイメージを併せ持つかは、伝説を見るだけでは分からない。

降雪地域の住民が「雪」を肯定的に捉えるのはなぜか。この疑問を解決するために②の「雪太郎」について伝説の伝承地でのフィールドワークを行った。

１８話中「雪太郎」に関する調査しか行っていないので、はっきりしたことは言えないが、降雪地域の住民がなぜ「雪」を肯定的に捉えているのか、その一因を示すことができるのではないかと考える。

Ⅲ　現代にも生きる雪の伝承～雪太郎～

（１）雪太郎伝承

「雪太郎」の伝説は、「雪」の恐ろしさについてはほとんど触れておらず、むしろ「雪太郎」の訪問を喜ぶ長者夫婦の様子は、降雪そのものを肯定しているように思える。

『新潟県伝説集成』によれば、伝承地は東頸城郡牧村で、安塚町の菱里地区にも同じ話があるとしている[29]。

『新潟県伝説集成』の他にも、『新潟県の民話』[30]や牧村の郷史[31]などにも「雪太郎」の話が載っている。内容はほとんど同じであるが、細部や結末が違うものもあり、バリエーションがいくつかあるようだ。本稿では、『新潟県伝説集成』に記載された話をもとにフィールドワークを行った。

（２）上越市高田牧区宇津俣

『新潟県伝説集成』の「雪太郎」の伝承地「東頸城郡牧村」は、現在の市町村区分では「上越市高田牧区宇津俣」である。新潟県の西南部上越市内、牧区の東南端にあり、飯田川と湯の川の狭間部に位置することから「宇津俣」の名で呼ばれている[32]。冬季の降雪量は大変多く、国内屈指の積雪量である。筆者が５月初旬にフィールドワークを行なった際には、陽光の当たりにくい場所に、わずかではあるが雪が残っていたほどである。また、住民の方に聞くと、大雪の年は５、６メートルも雪が積もるそうだ。

（３）宇津俣地区での聞き取り調査

宇津俣でのフィールドワークは計２回行った。調査内容は主に、「雪太郎」について現地住民への聞き取りと伝説に登場する場所や人についての確認、資料収集である。

現地で住民の方々にいろいろと尋ねると、「雪太郎」について詳しい方がいるということで紹介

していただいた。その方（以下Ｓさん）は、宇津俣で農業を行いながら、農業体験を行える民宿を営んでいる方であった。

まず、現地の人の語りで「雪太郎」を聞きたいと思ったので、Ｓさんに「雪太郎」を話していただいた。

「雪太郎」　話者：Ｓさん、65歳、男性、上越市高田牧区宇津俣在住　採集日：2014/05/15

ここに昔、長者屋敷という、長者様が住んでいたところがあったんですね。でーそのー長者屋敷に、えーまあ長者がいて、その長者様には子どもがなかったと･･･いう家庭でしたね。そして、あのーまあ、大地主で、ここから直江津の海岸まで、えー人の土地を踏まずと、おー、いける。まあそれくらいの大地主、というか･････人だったという話ですね。

で、そういうなかで今言ったように子どもが、あーたまたま無かったのが、まあ非常に、あの･････さびしい思いをしていたというんですが、しかしながら長者様は地元の、あー集落のみなさんの、子供さんと、非常に可愛がってくれて、えー子どもと、まあ一緒にね、遊んだりとか、あーしてたと、いうはなし。あるいはまた大人の皆さん方には、あのー･･･米とか、生活のための米とか肉とか、そうしたものをみんな、皆さんに、えー、まあ、くれて、やっ、やってたと、まあそういう非常にまあ裕福な、あー長者様だったんでしょうね。

で、そうして生活をしている中で、あのー･･･冬に、たまたま、そのー、なんといいますか、あまど、いえ、昔のこういう建物のなかにあまどってあるんですよね。そのー、まあ玄関･･･と言えばいいのか裏口といえばいいのか、まあそういうところ、その戸を叩く音がしたと。でそのー･････音が聞こえたので、出てみると、まあ、吹雪の中だけども、んー･･･小さな子どもが、そこに立ってたと。

でその子が、まあ、あー自分の名前をユキタロウ、･･･と、いう名前を名乗って、それで、ま、こんなさぶいとこに、まあ、そうしていたってあれだけ、なかに入れと、いうことで、長者様が、あー中へ、まあ、入れたと、入れてくれたと。

で、うちの中に入れて、えー･･･あったかいものをめし･･･あがって、そしてまあ、そこで、えー色々会話するうちにこんどは、ここのうちに、まあ、あー･･･住むと、いうユキタロウが、まあ、自分の方から言い出して、ねぇ。

でそのー、そこに長者様の子どもいなかったということで、そこに、まあ、住みつく、ことに、なったんです。

それでまあ、あー正月あたりは、集落の皆さんの子どももみんなよって、楽しく正月遊びをして、で、日々を、まあ、すごしていた･･･(と)いう、うー暮らしぶりを、やってた。

で、そのー、ご、ですね、また、あー雪も、ほぼふりやむと、こんどはいよいよ、んー春に、向けて。そしてその春･･･を待って、いるかのように、ユキタロウはいつしか、えー長者様に、いー、まあ、黙って姿を消して･･･しまう。

でー、まあ、長者様じたいは非常にまあ、思いがけない･･･状態になったものだから、まあ、あちこち探してね。えーまたみなさんから手伝ってもらって探し･･･歩くんだけど、なかなか出てこないと。見つからないと･･･いうことで、まあ、なかば諦めていたと･･･そして、夏が来て、秋が･･･きて、そしてまた、次の冬が･･･くる。きた。そしてーそのときにまた、あまどを叩く音がしていってみたら、前より、いーひときわ大っきくなったユキタロウくんが、そこにまた、きてたと。

でー、そういう繰り返しが･･･なされて、長者様が、あー元気なうちはユキタロウくん、はそうしてたえず、ふ、冬になるときて、春になるといなくなると･･･そういう、うー言い伝え、の、ユキタロウくん、なんだね。

で、たまたま、あー長者様夫婦が、それぞれ、えー亡くなった･･･時から、ユキタロウはもうそこに、いー･･･訪ねては来なくなったし、えー･･･姿もだれも見なかったと。まあ、そういうことの言い伝え･･･で、まあ、くびられるわけですけどね。だから長者様が亡くなったらもう、姿も、うー何も･･･出さんくなったと･･･いうことなんですよね。

以上がＳさんの語る「雪太郎」である。話者

の語りのままに記載したために読みにくい部分もあるかと思うが、本稿を読まれる方にも現代に伝承された「雪の伝承」を実際に体感してもらいたいと思い、このような形態で記載させていただいた。

内容に関しては、『新潟県伝説集成』のものと大きな違いは無い。しかし、『新潟県伝説集成』では、雪太郎が長者のところへ現れなくなったために長者が死ぬのに対し、Sさんの語った話では、長者が死んだ後に雪太郎が現れなくなるという逆転がある。

そして注目すべき点は、長者の住んでいた場所が「長者屋敷」という場所だと指定していることだ。さらに、Sさんによると「長者屋敷」は宇津俣に実在する地名だということだったので、場所を教えていただき見に行った。

Sさんによると図1の場所、宇津俣の西南の高台が「長者屋敷」と呼ばれている土地だということだった。正式な範囲が決まっているわけではなく、「だいたいこのへん」が「長者屋敷」だそうだ。

写真2のように、現在は農地として使用されており、Sさんは現在この「長者屋敷」で農業を行っている。

Sさん以外の宇津俣の住民にも「長者屋敷」について確認したが、Sさんの言うように、図1で示した場所は確かに「長者屋敷」だと、聞き取りを行った全ての住民が答えた。

この「長者屋敷」からは、『新潟県伝説集成』にあるように「菱ヶ岳」という山を実際に見ることができた(写真3)。写真中央に見えるのが「菱ヶ岳」である。「長者屋敷」からはほぼ真東に位置している。Sさんは、「雪太郎」は「菱ヶ岳」からやっ

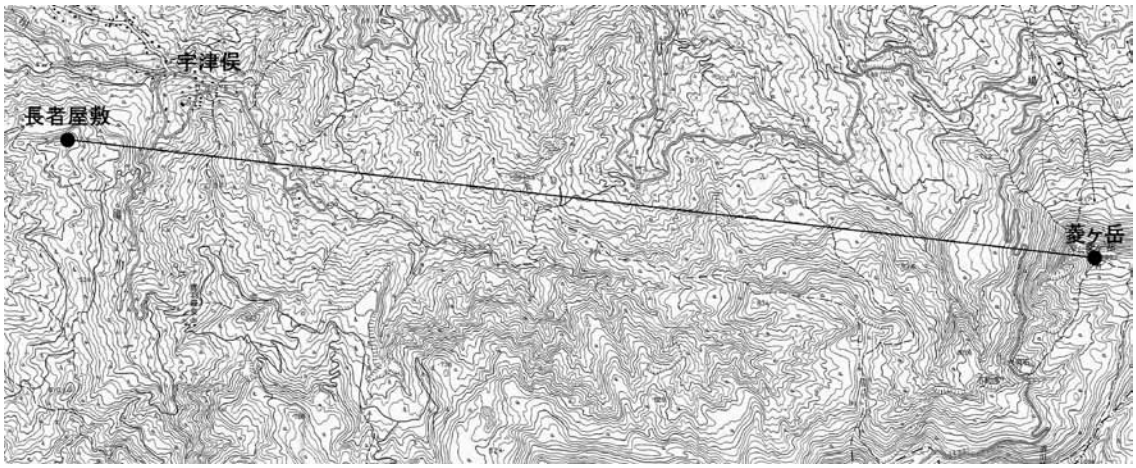

図1　宇津俣「長者屋敷」(国土地理院二万五千分の一地形図)

写真1　長者屋敷(筆者撮影)

写真2　長者屋敷の畑(筆者撮影)

写真３　長者屋敷から見える菱ヶ岳（筆者撮影）

てくるという話も聞いたことがあるとおっしゃっていた。しかし、実際にそのような描写があるバリエーションは発見できていない。

さらにこの「長者屋敷」からは、人工的に加工されたと思われる石がいくつも出土している（写真４）。伝承の通りかは分からないが、何かしらの建造物が建てられていた跡かもしれない。また、『天と地を紡いできた人々 － 宇津俣郷史 － 』によると、昭和初期に行った発掘調査でかわらけ・茶碗欠片（土器片）が出土したそうだ。そして、「雪太郎」とは別に、長者に関する伝承もいくつかあるようだ[33]。また、以前は火葬場があったという話[34]もあり、いずれにしても、住民の関心が寄せられていた土地であると言えるだろう。

このほかに、牧村の老人会が作ったという『牧村の昔ばなし』第２集の中に「雪太郎」の話が記載されていた[35]。話者は宇津俣ではなく、隣接している棚広新田とされている。この「雪太郎」も内容は他のバリエーションとほとんど同じであるが、話の結末部分に「雪太郎」が長者のところに現れなくなる描写や長者の死に関する描写が全く無いことが気になる。

写真４　長者屋敷から出土した石

このように、伝承地でのフィールドワークを行ってみると、文献のみでは得られない情報を多く入手することができた。この結果を用いて、次項では、降雪地域の住民が降雪を肯定的に捉える理由を、一つの事例として示すことを試みる。

Ⅳ　雪の伝承に関する環境知覚

前項のフィールドワークの結果を考察する前に、本研究の研究方法について簡単に説明したい。本研究で用いる研究方法は環境知覚研究というもので、地理学における一つの研究分野である。

環境知覚研究は、１９６０年代に隆盛した知覚地理学（perceptual geography）の中、特に行動地理学、文化地理学、歴史地理学、災害知覚の分野で発展してきた[36]。そもそも、環境の知覚とは、人間集団が固有の文化を持つため、それぞれの人間集団ごとに、実在的環境が同じであっても、知覚される環境は異なり、それに基づいた人間行動、形成される景観や地域性も異なってくるというものだ[37]。つまり、本研究では人間集団の文化の一つである伝説から、その伝説の伝承地域に住む人々が環境をどのように捉えているかを明らかにする研究だと言える。具体的に言うと、宇津俣の人々が降雪を肯定的に捉えている面があることを、その地に伝承された伝説を基に論ずるということである。

（１）「雪太郎」伝承に見る雪に対する肯定的な知覚

さて、宇津俣でなぜ降雪を肯定的に捉えているのだろうか。結果を先に述べてしまうと、それは「農業」と関係があると筆者は考えている。

宇津俣の生業の一つは農業であり[38]、現在も多くの住民が農業を営んでいる。フィールドワークの際に、「降雪が少ない年は春先に水が足りなくて困る」とおっしゃっていた方がいたのをきっかけに、「雪太郎」と農業との関係を意識した。

さらに、「雪太郎」に登場する「菱ヶ岳」は、『北越雪譜』の「菱山の奇事」[39]の中で次のように言われている。

「さて松の山の庄内に菱山といふあり、山の形三角なるゆゑの名なるべし。山にちかき処に須川村川によりて名づく菖蒲村といふあり。此ひし山、毎年二月に入り夜中にかぎりて雪頽あり、其ひゞき一二里に聞こゆ。伝ていふ、白髪白衣の老翁幣をもちてなだれに乗り下るといふ。また此なだれ須川村の方へ二十町余の処真直に突下す年は豊作也、菖蒲村の方へ斜めにくだす年は凶作也。其験少しも違ふ事なし。年の豊凶雪頽に係る事此山にのみ限るも一奇事といふべし」

この菱山とは「菱ヶ岳」のことである。雪崩の下り方によって豊凶作を占うのは「菱ヶ岳」だけだと言う。確かに、雪崩で占うことは奇事と言えるかもしれない。しかし雪山と農業の関係は深い。雪山と農業の関係性を示すものに「雪形」がある。雪形は山に積もった雪を動物などの形に見たてたもので、その形によって農業の凶豊作を占ったり、各種農作業を行う時期の目安にするなど、農事暦、自然暦として用いられてきたものだ。「菱ヶ岳」の雪崩による占いも、この「雪形」のようなものだろう。Ｓさんが、「雪太郎」は「菱ヶ岳」からやってくると聞いたことがあると言っていたことを考えると、無関係とは思えない。

図２は地図ソフトによって、長者屋敷から菱ヶ岳を見た様子を３Ｄで表したものだ。図中には２０１５年３月１５日の日の出の位置が示されている。「菱山の奇事」が起こるのは２月であるが、『北越雪譜』が書かれたのは江戸時代のため、旧暦であることを考えると、長者屋敷から菱ヶ岳の方角に日の出が見える時期と重なる。

この地域の旧暦２月（新暦２月下旬から４月上旬）あたりの年中行事の中に以下のようなものがある。

春の彼岸　二十一日前後 (40)

春分の日を「お中日」といい、その前後三日ずつの計七日間が彼岸である。最初の日を「彼岸の入り」といい、最後の日を「結願」という。雪がまだ多いこともあり、お墓参りの習慣はない。

近くの山に登り、入り日を拝む習慣のあった所もある。これは、仏教の影響を受ける以前の、農耕儀礼として豊作を祈願する「日願い」の名残といってよいだろう。

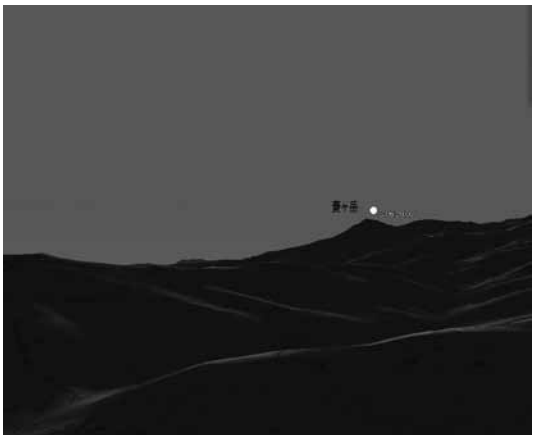

図２　長者屋敷から見た菱ヶ岳の日の出

烏場では、お中日に子供たちが山遊びをして入り日を拝んだ後、輪鳳寺に集まり、近所の参詣者と一緒に彼岸団子をもらい、大きな火鉢で一緒に焼いて食べるのを楽しみにしていた（昭和三十年代まで）。

今は、粉を挽いて彼岸団子を作る家はほとんどなく、おはぎを作って神仏に供えたり、菓子かパンを買ってきて供えることが多い。粉をイスス（石臼）で挽く作業は単純であるが、腕が疲れる。子供が母親や祖母を手伝いながら、彼岸のいわれなどを聞くことがよくあった。

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉は、雪がまだ多い春の彼岸では実感がともなわない。むしろ「彼岸過ぎても七荒れ」の言葉の方が実感がある。

これは、彼岸の行事であるが、農耕儀礼の一面も併せ持っている。

これらの諸要素をつなぎ合わせることは現段階ではできないが、決して無関係とは思えない。

（２）雪の伝承に関する環境知覚

このように、「雪太郎」伝承と農業の関わりを示す要素は多く存在し、宇津俣の人々が降雪を肯定する一つの理由として、十分な可能性があると筆者は考える。現段階においてはこれ以上「雪太郎」と農業の関わりを示すことは難しいだろう。しかし、現代の宇津俣においても、「雪太郎」と

農業の関わりは存在している。

調査の際にお話をお聞きしたＳさんは宇津俣で農業を行う方であるが､Ｓさんの畑の一部は「長者屋敷」にある。そして、Ｓさんがこの畑で育てている作物の一つに大根がある。Ｓさんがこの大根を販売するときに、何か宇津俣産であるというオリジナリティが必要だと考えて、大根につける商品名に悩んでいたとき、自身の畑がある「長者屋敷」にまつわる話を思い出し、「雪太郎大根」と名づけたそうだ。

Ｓさんが「雪太郎大根」を生産する以前からも、「雪太郎」は他の昔話や伝説に比べて住民の記憶に残っていたそうであるが、「雪太郎大根」の誕生によってさらに記憶に深く刻まれたようだ。フィールドワークでお話を聞いた住民の中には「雪太郎」について聞くと「ああ､あの大根の」と言って話してくれた方も多かった。

現代においても、「雪太郎」は肯定的に住民に受け入れられているようだ。そもそも、自身の作物にその名前を使っているということからも､「雪太郎」を肯定していることがうかがえる。

さて、本稿においては、現代にも受け継がれる「雪」に対する肯定的な知覚を十分に示すことができたと考えるが､「雪太郎」に関して言うならば、気になる点がいくつか残る。

『宇津俣郷史』によれば、１５９７年慶長２年の上杉絵図「越後国郡絵図」に初めて「高津郷うつのまた村」が現れるが、これ以前の大きな戦には関東から信越国境に関わるものが多く、これらの戦で落ち武者となったものが逃げ延び、村を形成したのではないかというのである。宇津俣に最も多い性は「佐藤」であるが､この佐藤家の起源は、川中島合戦での落ち武者（宇津丸と名乗る）であるとする伝承[41]もある。そして、「雪太郎」の伝説の中には、長者が広大な土地を所有していたという描写が含まれるものもあり、「雪太郎」伝承と権力者（元権力者）との関わりも考える必要がありそうだ。

Ⅴ　最後に

本稿では、『新潟県伝説集成』の「雪太郎」について研究を行ったが、「雪太郎」伝承には、権力者と雪太郎の関係や宇津俣以外の伝承地など、まだまだ研究の余地がありそうである。

また、「雪太郎」以外の「雪の伝承」に関しては全く調査を行えなかった。実際には、⑧の「鬼五郎の復讐」についても、伝承地でのフィールドワークを行ったのだが、この伝説について知っている方はもういないようだった。このように、今現在伝承の調査事態が難しくなっている状況にあるので、「雪太郎」以外の「雪の伝承」について調査をできなかったことが非常に悔やまれる。筆者自身や、本稿を読まれた方が、「雪の伝承」について興味を持ち、研究が進むことを願いたい。

そして、研究を進める中で強く感じたのが､「雪の伝承」を研究する上で「雪女」を避けて通ることはできないということである。集めようと思わずとも、研究の過程で多くの「雪女」の資料が手に入った。本稿ではそれらの資料を活用することはできなかったが、さらなる研究の際には一から「雪女」について研究を行なう必要がありそうだ。そうすることで、「雪の伝承」に現れてくる肯定的な知覚をさらに明らかにできるかもしれない。

今回は、環境知覚研究という視点から「雪の伝承」を研究したが、他の視点、例えば物語研究などから「雪の伝承」を研究したらどのような結果が得られるのだろうか。もう少し柔軟な視点で研究対象を見ていくことが必要だと研究を終えて感じた。また、本研究において最も反省すべき点は、フィールドワーク不足ということに尽きるだろう。「雪太郎」についても、その他の伝承についてももう少し調査を行うべきであった。

しかし、本稿においては、「雪の伝承」の豊富さ、降雪地域の住民が持つ雪に対する肯定的な知覚を、その一端ではあるが示すことができたと考える。

引用文献

（１）著ラフカディオ・ハーン、訳注田代三千稔、1974、『対訳ハーン１』、南雲堂、82-95 頁
（２）大迫徳行・野村純一・浜口一夫、1982、『日本伝説大系』第３巻、みずうみ書房、143-147 頁
（３）立石憲利・村岡克彦・永井彰子・松岡利夫、1987､『日本伝説大系』第１０巻､みずうみ書房、

76-77 頁
（４）下川清・福田晃・松本孝三、1982、『日本伝説大系』第１２巻、みずうみ書房、45 頁
（５）「 全国災害伝承情報」http://www.fdma.go.jp/html/life/saigai_densyo/
（６）小山直嗣、1995、『新潟県伝説集成〔上越篇〕』、恒文社
（７）小山直嗣、1995、『新潟県伝説集成〔中越篇〕』、恒文社
（８）小山直嗣、1996、『新潟県伝説集成〔下越篇〕』、恒文社
（９）小山直嗣、1996、『新潟県伝説集成〔佐渡篇〕』、恒文社
(10) 前掲６、193 頁
(11) 同上、241-243 頁
(12) 前掲７、62-63 頁
(13) 同上、68-69 頁
(14) 同上、138-140 頁
(15) 同上、149-150 頁
(16) 同上、226-227 頁
(17) 同上、228-230 頁
(18) 同上、270-272 頁
(19) 同上、281-282 頁
(20) 同上、317-319 頁
(21) 同上、342-343 頁
(22) 同上、346 頁
(23) 前掲８、43-45 頁
(24) 同上、285-286 頁
(25) 同上、288-289 頁
(26) 同上、400-401 頁
(27) 同上、423-424 頁
(28) 前掲３
(29) 前掲６、241-243 頁
(30) 今村廣、1979、『新潟県の民話』、偕成社、12-19 頁
(31) 宇津俣郷史編集委員会・新潟県東頸城郡牧村、1999、『天と地を紡いで生きた人々―宇津俣郷史―』、125-126 頁
(32) 牧村史編さん委員会、1998、『牧村史』通史編、1130 頁
(33) 前掲３１、65-66 頁
(34) 同上
(35) 牧村教育委員会、1986、『牧村の昔ばなし』第２集、26 頁
(36) 佐々木高弘、2014、『神話の風景』、古今書院、133 頁
(37) 菊池利夫、1977、『歴史地理学方法論』、大明堂、140 頁
(38) 前掲３１、47-48 頁
(39) 鈴木牧之、1982（1837）、『北越雪譜』、岩波書店、94-95 頁
(40) 前掲３２、1052-1053 頁
(41) 前掲３１、19 頁